

ルカ福音書19章11節以下に「ムナの譬え話」が登場します。その1節後半部分に、イエスがムナの譬えを話始めるきっかけが出てきます。「イエスは更に一つのたとえを話された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていたからである」とあります。人々が神の国がすぐにも現れるものと思っていたという前提が語られています。

イエスがこの世の支配者であるローマ帝国をエルサレムに入場すると蹴散らして、イエスが支配される神の国が到来すると人々が考えていたのです。そのような周囲の期待をひしひしと感じていたイエスはムナの譬えを話し始めるのです。ある立派な家柄の人が、王の位を受けるために、遠い国へ旅立つことになった。そこで、彼は、10人の僕を呼んでそれぞれに1ムナずつ渡して、「わたしが帰ってくるまでに、これでお金を働かせなさい」と言ったのです。この話は、私たちが良く知っているタラントンの譬えと似ています。

タラントンの譬えでは、王はそれぞれの力に応じて、5タラントン、別の人には2タラントン、また別の人には1タラントンを預けたという話です。それで、5タラントンを預かった人は別に5タラントン儲け、2タラントンを預かったものは2タラントン儲けたという話です。1ムナという金額がどれくらいの価値があるのかをまず見たいと思います。タラントンやデナリオンと比べるとあまりムナという貨幣の単位はなじみが薄いと思います。

聖書の巻末も「度量衡および通貨」の表がありますので、開いていただきたいのですが、¹ 1ムナは100ドラクメという表示があります。ドラクメの2つ上にデナリオンの通貨の単位があつて、デナリオンとドラクメは同じ対価であると書いてあつて、1デナリオンは1日の賃金にあたるとあります。つまり1ムナが100ドラクメということは、100デナリオンですから、100日分の賃金だということがわかります。これに対して、1タラントンは6000ドラクメに相当すると書いてあります。つまり6000日分の賃金に相当します。現代の価値基準で考えてみるために、1日の賃金を1万円と単純に割り当ててみると、1ムナは100万円で、1タラントンは6000万円になります。

タラントンの譬えで5タラントンを預かった者は3億円預かったことになります。一方、10人の僕がそれぞれ預かったのは100万円でした。100万円で商売しておきなさいと言われても、果たして100万円で店を開くにしても、とても資金は足りないように思えます。何か特別の秘策があれば別ですが、日頃から商売の目当てを立てていれば100万円の資金でも儲ける仕事がいかに浮かぶかもしれませんが、100万円で渡されても、商売の準備が整っていない者にとっては儲ける事業を立ち上げるのは難しい気がします。

さて、僕たちは皆等しく同じ1ムナを預かったのですから、あとはその預かったものをどのように用いたかということになります。そこで結果を見ていくと、ある僕は1ムナを用いて10ムナ儲けました。ある僕は1ムナで5ムナ儲けたと話が進んでいきます。

そして、最後に登場する僕は、その1ムナを使わずに布に包んでしまっておきましたと言っています。この主人は「悪い僕だ」と怒って、「その言葉のゆえにお前を裁け」と言って、その1ムナも取り上げてしまうのでした。

このムナは何を譬えているのでしょうか。神から私たちに預けられているムナとは何か。神から私たちに等しく与えられているにもかかわらず、その使い方次第でたくさんの実りを生み出すものになるけれども、布に包んでしまっておくこともできるものとは何か。それは、御言葉の種だということがわかります。

私たちの青戸教会は、中山真多良牧師の開拓伝道で始まったんですが、この中山牧師は日本の敗戦後は上海で戦犯になった人たちに対する支援活動を行った後、昭和24年に引き揚げて来て江東地域で伝道をはじめ、青戸でも始めた牧師ですが、特筆すべきは賀川豊彦牧師が神戸の新川のスラムに住んで伝道活動をいたように、上野や浅草の片隅で生きていた浮浪者の人たちに食べ物や栄養剤、風邪薬などの必需品を配りながら、聖書や伝道用パンフレットを配る活動を長年行った人物です。

戦後の混乱期に上野には特攻崩れの若者や落ちぶれた引揚者、紙くすや煙草の吸殻を拾い集めて売っては辛うじて糊口をしのご浮浪者、戦災で親を亡くして社会の荒波に放り出された浮浪児たちがたくさんいました。今は曲がりなりにも、いろいろなセーフティネットがありますが、当時はそういった社会保障制度が整っていなかったので、中山牧師の働きは貴重なものでした。中山牧師がキリスト新聞にご自分の活動を連載した文章によると、泥沼の中から立ち上がった一人の女性のことを紹介しています。その女性は、北海道に生まれたが、戦争で両親が亡くなり祖父に育てられたが、そのうち、祖父も死に天街孤独になり、頼るところもなく流れ流れて東京にたどり着いた。

しかし敗戦後の運命は特に過酷で、そこで待っていたものは、悲しい夜の女のどん底に生きる道しかなかった。17歳、18歳の小娘にあまりにも残酷な運命が、その当時嵐のように渦巻いていた。その女性は熱心に信仰の道を求め、聖書を一生懸命に読み、泥沼の生活から足を洗って更生した。その女性が、「先生、聖書の中に患難をも喜びというところがありますね。私はあの聖句が本当にいいです。私のために書いてくださったように感じ、カづけられます。私は悲しい時には上野の森の中に行って、聖書を読んでいるのです。そうすると、心の中に喜びがあふれるように湧いてくるのです」と語ってくれたといいます。

また、ある女性が中山牧師の路傍伝道の話が終わっても立ち去らないので、手招きして話を聞いてみると、もう体を売るしかない絶望的になっていた中で話を聞いていたというのです。必ず、仕事が見つかるからと励まして送り出したそうですが、後日、「仕事が見つかりました。あの時、先生の話に立ち止まって良かったです。」と報告しに来てくれたそうです。もちろん、すべてが良い結末ばかりではないのですが、中山牧師にも、この女性たちにも、私たち一人ひとりにムナの御言葉が与えられて、生かされているのです。

賀川牧師や中山牧師といった傑出した活動をした人物にも、私たち普通の信仰者にもムナの御言葉が等しく与えられています。そこには一切の違いもなく平等です。あとは、そのムナの御言葉に従って生きていくか、どうすべきかなのです。確かに、ムナを大切に布に包んでしまいいこんでしまう道もあります。でも、ムナの御言葉を頼りに生きていくことから開けてくる新しい景色が見えてくるのです。そこは神の国という、神の御旨が支配している新しい世界なのです。そしてそこには私たち信仰者が生きる喜びを生み出す世界が広がっているのです。そして、その世界へと招く主イエスの声が既に私たちに届いているからです。